256292
2-1
昭和27年1月7日

日本國憲按

宮内庁書陵部

日本國憲按

第一篇

第一章　皇帝

第一条　日本帝国ハ萬世一系ノ皇統ヲ以テ之ヲ治ム

第二条　皇帝ノ身體ハ神聖ニシテ侵ス可カラザル者トシ又何レノ責ニモ任スルヿナカル可シ

第三条　皇帝ハ行政ノ權ヲ統フ

第四条　皇帝ハ諸官吏ヲ命シ及之ヲ免ス

第五条　皇帝ハ法律ヲ確定シ及之ヲ布告ス

第六条　皇帝ハ陸海軍ノ大元帥ニシテ便宜之ヲ派遣スルヿヲ得但シ武官ノ黙陟及退老ハ法律ヲ以テ定メタル例規ニ從ツテ皇帝之ヲ決ス

第七条　皇帝ハ戦ヲ宣シ和ヲ講スルノ權ヲ有ス然レモ

国財ヲ費シ国境ヲ変スルガ如キ条約ハ元老院ノ承認ヲ得ルニ非サレハ其効ヲ有セス

第八条　皇帝ハ罪犯ヲ赦免シ及ヒ之ヲ減軽スルノ権ヲ有ス

第九条　皇帝ハ貨幣ヲ造ルヿヲ命ス

第十条　皇帝ハ元老院及ヒ其他ノ議会（地方官会議ノ類）ヲ徴集シ又ハ其集会ヲ延ハシ及ヒ其閉会ヲ命ス

第十一条　皇帝ハ位記爵称及賞牌ヲ賜與ス

第二章　帝位継承

第一条　現今統御スル皇帝ノ子孫タル可キ者ヲ以テ帝位継承ノ正統ノ裔トシテ帝位ヲ世傳ス

第二条　継承ノ順序ハ嫡長入嗣ノ正序ニ循フ可シ尊系ハ卑系ニ先チ同系ニ於テハ親ハ疎ニ先チ同族ニ於テハ男ハ女ニ先チ同類ニ於テハ長ハ少ニ先ツ

第三条　前条ニ定メタル次序ニ依リ帝位ヲ継承ス可キノ皇統在ラザルトキハ皇族（諸親王家）ノ中親疎ノ次序ニ依リ帝位ヲ継承ス可シ

第四条　女主入テ嗣クトキハ其夫ハ決シテ帝國ノ政治ニ干與スルヿ無カル可シ

第五条　特別ノ場合ニ際シ帝位継承ノ次序ヲ変易スルヿヲ必要トスルヿアルトキハ元老院ノ承認ヲ得ヘシ

第六条　即位ノ禮ヲ行フニ方ツテハ元老院集会ノ前ニ於テ国憲ヲ確守スルノ誓ヲ宣フ

第三章　皇帝未成年及其摂政

第一条　皇帝ハ満十八歳ヲ以テ成年トス

第二条　皇帝未成年タルノ間ハ継承ノ次序ニ依リ皇族

ノ中最親ニシテ満二十歳以上ノ者摂政ノ職ニ任ス可シ

第三条　冑統ノ皇族在ラザルトキハ母后摂政ノ職ニ任ス可シ

第四条　以上ニ掲載スル所ノ摂政職ニ関スル定メハ成年ナル皇帝ノ改ヲ親ラスルヿ能ハザル状アル時ニモ亦準拠ス可キ者トス此時ニ於テ若シ満十八歳ノ太子アルトキハ此太子摂政ノ職ニ任ス可シ

第五条　摂政ハ元老院集會ノ前ニ於テ未成年ノ皇帝ニ忠誠ヲ竭シ且国憲ヲ確守スルノ誓ヲ宣フ可シ

第六条　摂政在職ノ間ハ国憲ノ中一ノ改正ヲ行フヿヲ得ス

第四章　帝室経費

第一条　皇帝ノ所有ニ属スル不動産ハ一般ノ法律ヲ以テ之ヲ管理ス

第二条　皇帝ノ在位間ニ得タル不動産ハ之ヲ贈遺スルヿ自由ナリトス若シ其在位中贈遺ヲナサヾルトキハ之ヲ以テ帝領世傳ノ者トス

第三条　皇帝及皇族ノ歳入ハ毎即位ノ時法律ヲ以テ之ヲ定ム

第四条　皇居及離宮ノ建築及修繕ハ国庫ヨリ其費用ヲ供ス可シ

第五条　皇后寡居シ及ヒ太子ノ満十八歳ニ至ルトキハ国庫ヨリ歳入ヲ受ク太子妃ヲ納ルヽトキハ其数ヲ倍ス但シ歳入ノ数ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第二篇

帝国

第一条　凡ソ我帝国ノ土地現今區域ノ内ニ在ル者日本帝国ヲ成ス

第二条　帝国州邑ノ疆界ハ法律ニ由ルニ非サレハ之ヲ変易スルヿヲ得ス

第三条　藩屬地ノ政治及事務ハ別段ノ法律ヲ用ユ

第三篇

国民及其権利義務

第一条　凡ソ我ク日本帝国ノ人民タル者ハ皆日本国民ノ権利ヲ有ス

日本国民ノ権利ハ如何シテ之ヲ得或ハ之ヲ失フカハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第二条　凡ソ日本国民タル者ハ法律ニ於テ平等トス

第三條　内外人ヲ論セス凡ソ帝國内ニ在ル人民ハ其身體及財産ノ保護ヲ受ク但シ外國人ノ為ニ定ムル特條ハ此例ニアラス

第四條　凡ソ國民ハ法律ニ定メタル特條ノ外均ク公權私權ヲ享有シ又タ文武ノ官職ニ任スルヿヲ得

第五條　凡ソ國民ハ國費ヲ支ユル為メ應當ノ貢入ニ參加スルノ義務ヲ有ス

第六條　兵役ハ凡ソ日本國民ノ義務タリ徵募ノ方法ト服役ノ期限トハ別段ノ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第七條　人身ノ自由ハ侵ス可カラザル者トス〇法律ニ定メタル場合ニ當リ及ヒ法律ニ掲ケタル規程ニ循フニ非ザレハ之ヲ拘引、拿捕若クハ囚禁スルヿヲ得ス

第八條　遷徙ノ自由ハ兵役ノ故ヲ以テスルノ外ハ之ヲ

制限スルヿヲ得ス

第九条　住居ハ侵ス可カラザル者トス○法律ニ定メタル場合ニ當リ及ヒ法律ニ掲ケタル規程ニ由ルニ非サレハ住居ニ進入シ及ヒ検索スルヿヲ得ス

第十条　変異ノ場合ニ當リ国安ヲ保ツカ為メノ故ヲ以テ帝国ノ全部若クハ局部ニ於テ前二条ノ憲法ヲ停止スルヿヲ必要トスルトキハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第十一条　財産ハ侵ス可カラザル者トス○公益ノ故ニ由リ及法律ニ定メタル場合ニ當リ及ヒ法律ニ掲ケタル規程ニ由リ而シテ預メ應当ノ賠償ヲナスニ非ザレハ何人モ其私有ヲ褫ハルヽヿナカル可シ

第十二条　信書ノ秘密ハ侵ス可カラザル者トス○凡ソ信書ヲ匂収スルハ法律ニ定メタル場合ニ当リ及ヒ法律ニ掲ケタル規程ニ由ルニ非サレハ之ヲ行フヿヲ得ス

第十三条　日本国民ハ豫メ監査ヲ受クルヿナク出版ニ由テ其意思若クハ論説ヲ公ケニスルヿヲ得但シ法律ニ對シテ其責ニ任ス可シ

第十四条　日本国民ハ各自ニ信仰スル所ノ宗旨ヲ奉スルヿ自由ナリトス然レトモ民事政事ニ妨害ヲナスハ之ヲ禁ス

第十五条　日本国民ハ兵器ナク平穏ニ集會スルノ権又タ會社ヲ結フノ権ヲ有ス但シ此権ノ受用ハ別段ノ法律之ヲ定ム

第十六条　日本国民ハ各自ニ上言ノ権ヲ有ス然レトモ連衆一名ニテ上言スルヿヲ得ス但シ官ニテ認メタル會

社ニ限リ連衆一名ニテ上言スルヿヲ許ス此場合ニ於テハ其會社ノ事件ニ付テノミ上言スルヿヲ得

第十七条　凡ソ日本国民ハ皇帝ノ許可ヲ得ルニ非レハ外国ノ賞牌爵称及養老銀ヲ受クルヿヲ得ス

第四篇

第一章立法権

第一条　立法ノ権ハ皇帝ト帝国議會トニ分ツ故ニ皇帝ハ其議案ヲ下附シ議會ハ其議案ヲ上奏スルヿヲ得

第二条　帝国議會ハ元老院及ト其他ノ議會ヨリ成ル

第三条　法律ヲ申明シテ一般ノ定例トナスハ立法権内ニ属ス

第二章　元老院及ト其権利

第一条　元老院議官ハ定員ナシ皇帝ハ左ニ開載スル各人ノ内ヨリ特選シテ議官トス

一　華族

一　勅奏官ニ昇リシ者

一　国ニ功労アリシ者

一　政治法律ノ学識ヲ有スル者

第二条　皇族ハ元老院議官タルノ権ヲ有ス議長ノ下議官ノ上ニ坐ス可シ満十八歳ニシテ院中ニ参入シ満二十歳ニシテ公議ノ権ヲ有ス

第三条　元老院ノ議長及副議長ハ皇帝之ヲ選フ

第四条　元老院ハ立法ノ権ヲ受用スルノ外左ノ諸事ヲ掌ル

一　諸大臣ノ罪ヲ論告スルヿ

一　国憲ニ掲ケタル場合ニ於テ外国条約及帝位繼

兼ノ次序ヲ変易スルノ兼認ヲナシ及ト皇帝即位ノ時又ハ摂政在職ノ初ニ方ツテ其宣誓ヲ聽クヿ

一　立法ニ関スル上言書ヲ受クルヿ

第五条　元老院ハ諸大臣ノ出頭ヲ求ムルヿヲ得又タ諸大臣出頭シテ意見ヲ陳フルヿヲ得但シ決議ノ數ニ加ハラス

第六条　議官ハ過半數列席スルニ非サレハ會議ヲ開クヿヲ得ス

第七条　元老院ハ過半數ヲ以テ可否ヲ決定ス

第八条　元老院ノ會議ハ公行トス然レトモ議長若クハ議官五人ノ求メニ依リ密會ヲ行フヿヲ得

第九条　議官ハ其職ヲ行フニ付キ發言シタル意見ノ為メ審糾セラルヽヿナシ但シ院中ノ條例ニ循フハ此例ニアラス

第十条　議官ハ現行犯ヲ除クノ外元老院ノ許可ヲ得スシテ拘引拿捕セラルヽヿナシ

第十一条　皇帝崩シ又ハ其位ヲ辞スルニ當リ會マ元老院ノ閑會セザル片ハ預メ召集ノ命ナクトモ直チニ自ラ集會ス可シ

第十二条　凡ソ議官タル者ハ国憲ヲ確守スルノ誓ヲ宣フ

第五篇

行政権

第一条　皇帝ハ諸大臣ヲ任シ及ヒ之ヲ免ス

第二条　諸大臣ハ職務ニ付テノ責ニ任ス法律及ヒ一切

ノ文書ハ大臣一人ノ署名アラザレハ其力ヲ有セス

第三条　凡ソ諸大臣ハ国憲ヲ確守スルノ誓ヲ宣フ

第六篇

司法権

第一条　司法権ハ上下等裁判所ニ由リ皇帝ノ名ヲ以テ之ヲ施行ス上下等裁判所ハ法律ヲ除クノ外它ノ権威ニ従フヿナシ

第二条　凡ソ裁判官ハ皇帝ヨリ任セラルル裁判官ニ由リ皇帝ノ名ヲ以テ宣告ス

第三条　皇帝ノ任セラルル裁判官ノ三年間在職セラルル者ハ審判ノ故本人ノ願及老退ノ故ニ非スシテ免黜セラルヽヿナシ

第四条　上下等裁判所ノ構制、権任ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム〇法律ニ定メタル場合ヲ除クノ外裁判ヲ行フカ為メ特別ノ裁判所ヲ設クルヿヲ得ス

第五条　陸海軍裁判所ノ権任ハ別段ノ法律ヲ用ユ

第六条　日本帝國ニ一ノ大審院ヲ置ク

第七条　大審院ハ法律ニ掲ケタル職務ノ外元老院ノ論告シタル諸大臣及元老院議官ノ罪ヲ審判ス

第八条　大審院及裁判所ノ検事ハ皇帝之ヲ任シ及ヒ之ヲ免ス

第九条　民事刑事ノ別ナク裁判所ノ裁判ハ公行トス然レトモ國安及ヒ風儀ニ関スルニ由リ特例ヲ設クル者ハ公行ヲ停ムルヿヲ得

第十条　凡ソ裁判ハ必ス理由ヲ付ス

第十一条　凡ソ司法ノ官吏ハ國憲ヲ確守スルノ誓ヲ宣

第七篇

會計

第一条　政府ハ毎年翌年ノ國費概算表及ヒ國費ヲ支ユ可キ意見書ヲ元老院ニ送致シ且租税ノ徴收及ヒ其費用ヲナセシ報告書ヲ送致シテ以テ其檢査ト兼認トヲ得ヘシ

第二条　法律ノ兼認ヲ得ザル租税ハ之ヲ賦課スルヿヲ得ス

第三条　凡ソ租税ニ係リ苟モ特准ヲ与フルヿヲ得ス

第四条　國債ハ法律ノ兼認ヲ得ルニ非サレハ之ヲナスヿヲ得ス○政府ヨリ其債主ニ對スルノ義務ハ侵ス可カラザル者トス

第五条　貨幣ノ分量、品性、及價直ハ法律之ヲ定ム

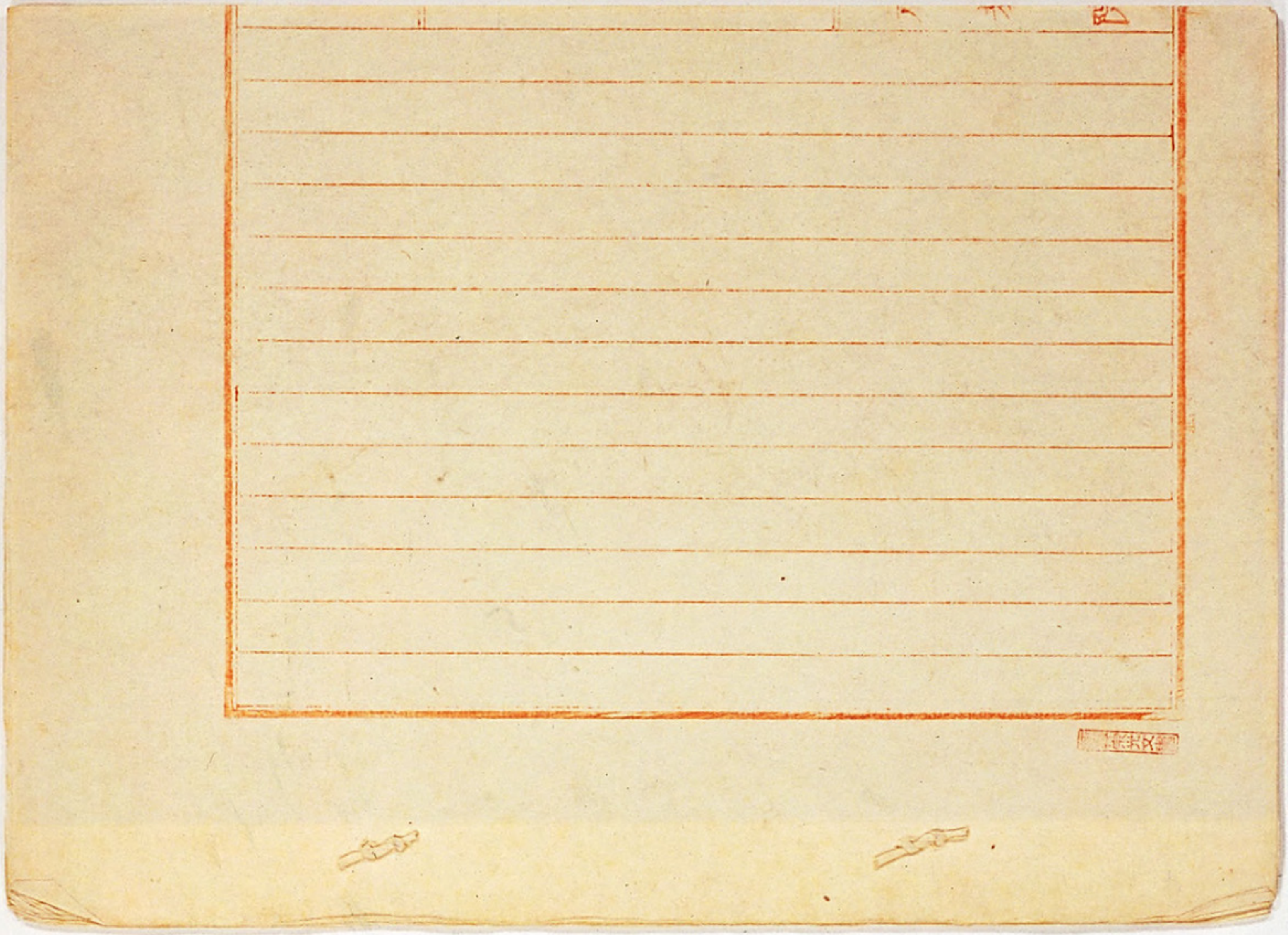
第八篇

國憲修正

第一条　立法權ハ國憲中某條ノ脩正ヲ要スルヿヲ宣告スルノ權ヲ有ス

第二条　國憲ノ脩正ヲ議スルニ方ツテハ元老院議官少クトモ三分ノ二列席セザル片ハ其事ヲ議スルヿヲ得ス而シテ少クトモ之ヲ可トスル者三分ノ二ニ盈タザレハ變改ヲナスヿヲ得ス

附録

第一條　此ノ國憲施行ノ日ヨリ始メ此ノ國憲ニ抵觸スル法律ハ之ヲ廢ス

第二條　此ノ國憲ニ掲ケタル皇帝及ト諸大臣議官及司法官吏ノ誓ヲ宣フルヿハ此ノ國憲施行ノ日ヨリ直ニ之ヲ行フ可シ